

青年期男女にみられる問題行動傾向の構造

長 谷 川 博 一

1. はじめに

主に高校年代の青年の呈する様々な問題行動に対して、長谷川（1988）は、表現された行動のひとつの側面で呼称し、それに基づいて予防治療上の検討を行なうことの問題を指摘した。すなわち、登校拒否、非行、家庭内暴力、自殺などの現在の理解枠を続ける限り、問題の本質、成因、解決策はなかなかみえてこないのである。

たとえば「登校拒否」という呼称は、学校へ行くか行かないかを考慮したときに用いられるのであって、その中に当事者の自我のあり様、対人態度や親子関係などといったまさに重要と思われる概念は含まないのである。そうしていると必然的に、分類呼称上の矛盾に突き当たり、「……型登校拒否」など下位概念の必要が生じる。また、ほかの問題との関連を論じるにしても、「非行」との関連というように、結局は問題の本質とはかけ離れた表現系での議論になってしまう。

筆者らの登校拒否研究グループが、実際に登校拒否を主訴とした相談事例を分析した結果、やはり神経症的（狭義の）登校拒否と非行型登校拒否は、母子関係といった本質面で区別されるべきであることが示唆された（池田・長谷川ほか、1987）。このことから、登校拒否という概念は単なる通俗的な呼称の域を出ていないのがわかる。

精神医学的には、まさに藤本（1974）のいったように、既存の疾患単位に明確に当てはめられる場合は、その症状が学校に出席していないことを問題にしなければならない理由はないの

である。仮に、対人恐怖症（あるいはボーダーライン・パーソナリティ・ディスオーダー）であると診断されたのであれば、この青年の表面上の行動をさして、登校拒否であるとか非行・家庭内暴力などということの意味はなくなるのである。

しかし、精神医学の対象とする青年と、心理学あるいは教育上の配慮が要求される青年（筆者が問題にあげる青年）とは、オーバーラップする領域は小さいのが実情である。心理学ではより健康に近い水準を中心に扱うのであり、したがって新たに、心理学的に専門的な診断概念が必要なのである。

このような理念をもって、「外向型問題行動－内向型問題行動」という類型化の試論提出（長谷川、1988）を経て、長谷川（1989）は、問題行動リストへの回答結果を統計的に分析し、問題行動の因子構造を示している。女子大学生を対象にしたレトロスペクティブな調査の結果、問題行動傾向に5因子が抽出されている。次章で、その女子についての報告の簡単なレビューを行なう。

向山ほか（1989）は、青年期に生じやすい心理学的・精神病理学的な問題傾向を自己意識との関連で検討している。問題傾向18項目を因子分析して、「強迫・対人関係の問題」、「独立・抑鬱の問題」、「身体・摂食の問題」の3因子を見いだしている。しかし、ここで採用された項目は青年期の問題傾向全般を網羅しておらず、特に非行傾向などの外向型の問題は考慮されていないといえる。

II. 問題行動の因子構造 (1)

——女子の結果についての

レビューと若干の追加——

1. 方 法

90項目で構成される高校生用問題行動傾向リスト（付表）を大学生女子135名に対して、「高校3年間の自分に当てはまるかどうかで教えてください」という教示で、5段階評定を求めた。

2. 結 果

回答結果を因子分析（主因子法、バリマックス回転）して5因子を抽出した。それぞれ、I：奔放、II：対抗、III：身体、IV：意識、V：無為の因子と命名した（TABLE 1）。

奔放の因子は、外泊、校則違反、深夜外出、遊戯場への出入り、アルバイトなどの項目を含み、対抗の因子は、授業放棄、盗み、校内器物破損、喧嘩、いじめ、教師との対立などの項目を含み、身体の因子は、欠席、校内での身体不調、登校前身体不調、病弱、ナンパ、家出、デート、性行為、仮病、化粧などの項目を含んでいる。さらに、意識の因子は、自殺念慮、性格や容姿の悩み、やる気消沈、両親嫌悪、転校願望、成績へのこだわりなどの項目を含み、無為の因子は、家庭での不勉強、授業中の居眠り、自室の散らかし、外出拒否、趣味の無いこと、成績不振、テレビ中心の生活などの項目を含んでいる。

3. 女子における問題行動傾向プロフィール

長谷川（1989）以降、女子に関してさらに116名の同質のデータを得たので、合わせて251名の回答状況もとに、被験者の各因子への傾向をプロフィール化した。ここでいう因子への傾向とは、その因子を構成する質問項目に対する得点が高い（平均得点より1標準偏差以上である）ことを意味している。

FIG. 1に、女子における頻出プロフィールを示した。身体の因子のみに問題傾向がうかがえる身体型。対抗の因子のみの対抗型が多いことがわかる。

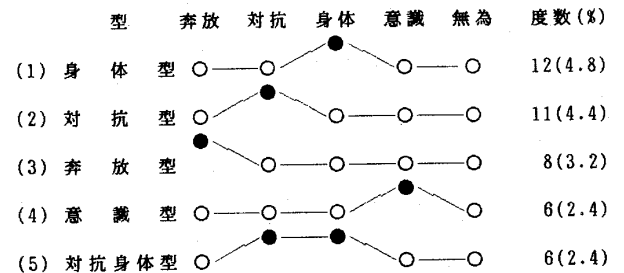


FIG. 1 問題行動傾向頻出プロフィール
(女子251名)

●は問題傾向あり、○は問題傾向なし。

TABLE 1. 問題行動傾向の5因子（女子）

因子名	因子内容
I 奔放	社会的制限を逸脱した自由勝手な態度、行動
II 対抗	他者への対抗の結果として生じる態度、行動
III 身体	身体的愁訴と身体への過度な関心から生じる態度、行動
IV 意識	特定の観念に囚われている意識上の煩悶状態
V 無為	行動—精神両面における活動水準全般の低下状態

Ⅲ. 問題行動の因子構造 (2)

——男子についての分析結果——

1. 目 的

男子青年の問題行動傾向の因子構造を明らかにする。同時に、女子の結果との異同を検討する。

2. 方 法

手続きは、長谷川 (1989) と同一である。予備調査によって決定された90項目の問題リスト (付表) を用いた。なお、90項目のうち86項目は男女共通であるが、残る4項目は男子用に修正した。これらの問題行動リストに対し、「高校3年間の自分に該当するかどうか」という教示で、5件法の回答を求めた。被験者は、大学1, 2年男子211名で、調査の実施は5~6月である。

結果を、パーソナルコンピュータ (PC-98 R X, 統計解析ソフト「自在」) を用いて因子分析 (主因子法、バリマックス回転) した。

3. 因子分析の結果

女子データに実施したのと同じ基準で因子分析を実施し、5因子を抽出した結果がTABLE 2 (因子負荷の高い35項目を抜粋) である。

第Ⅰ因子は、「デートをした」、「恋人がいた」、「酒を飲んだ」、「外泊した」、「性行為をした」、「バイクに乗った」、「たばこを吸った」、などの29項目に負荷が高い。社会的な枠を逸脱した自由奔放な態度を表現した因子であると考えられ、女子の結果と同じ奔放の因子と命名した。

第Ⅱ因子は、「学校を欠席した」、「学校のもの壊した」、「嫌いな授業には出なかった」、「先生に反抗した」、「先生に叱られてばかりいた」、「カッとなって暴れた」などの25項目に負荷が高い。教師や友人などの他者の関与する場面で、その人物への敵対の結果生じる行為が多くなっている。やはり女子例と同じく、対抗の因子と命名した。

第Ⅲ因子は、「誰にも言えない悩みがあった」、「性格や容姿のことで悩んだ」、「いつも人についていった」、「何もやる気がしなくなった」、「夜、眠れなかった」、「テレビばかり見ていた」

などの12項目から、意識過剰の結果、心理的苦痛にみまわれて建設的な行動がとれないでいる状況が推察される。したがって、女子例と同じく、意識の因子とした。

第Ⅳ因子は、「いい成績をとろうと気にした」、「塾通いで忙しかった」、「外出するときは親と一緒にだった」、「香水を使用した」に正の負荷が高く、一方「家で勉強しなかった」、「部屋は散らかっていた」などに負の負荷が高い (計7項目)。両親からの期待への同一化傾向と、自己の身体の臭いへのとらわれ状況などから、強迫的傾向がうかがわれるので、強迫の因子と命名した。

第Ⅴ因子は、「学校ではじっとしていた」、「学校に親友はいなかった」、「ほとんど外出しなかった」、「クラブ活動に参加しなかった」、「趣味はなかった」など、いずれも活動性の低下を表わす9項目に負の負荷が高くなった。したがって、この因子は活動性という肯定的因子である。そこで、この因子に含まれる項目すべてへの回答を反転させ、否定的な非活動性を表現させることとした。そして、女子にみいだされた因子にしたがって、無為の因子と命名した。

残余項目は、「いつも菓子類を食べていた」、「何でも親の言うとうりにする方だった」、「自分の部屋に鍵をつけていた」など8項目であった。

奔放、対抗、意識、無為の4因子は男女普遍に抽出された。女子には身体因子がみいだされたのに対して、男子には強迫因子が特有であったといえる。なお、女子の因子との比較を容易にするために、因子の順を、Ⅰ：奔放、Ⅱ：対抗、Ⅲ：強迫、Ⅳ：意識、Ⅴ：無為とした (TABLE 3)。

4. 各因子への被験者の回答傾向

次に、それぞれの因子の表現する態度や行動について、実際に被験者はどのような回答をしたか (高校3年間にどの程度経験しているか) について述べる。FIG. 2~7に、因子別に5段階評定の回答状況を示した。なお、回答は、1：あてはまる、2：どちらかといえばあてはまる、3：どちらともいえない、4：どちらかといえばあてはまらない、5：あてはまらない、

青年期男女にみられる問題行動傾向の構造

TABLE 2. 問題行動傾向因子分析の結果 (男子210名、35項目抜粋)

No.	項 目	I	II	III	IV	V
11.	よくデートをした。	.77	-.03	-.06	.03	-.13
23.	恋人がいた。	.69	-.02	-.03	.01	-.08
4.	時々酒を飲んだ。	.63	.04	.02	-.15	.07
75.	時々外泊をした。	.63	.18	.12	-.21	.20
20.	性行為をした。	.62	.02	-.12	-.01	-.17
3.	時々バイクに乗った。	.61	.01	.03	-.18	-.06
64.	たまに女の子をナンパした。	.61	.19	.08	.09	-.12
24.	よく繁華街へ出かけた。	.59	.13	.24	-.03	.09
31.	時々たばこを吸った。	.59	.23	.06	-.14	-.02
40.	学校をよく欠席した。	.09	.68	-.04	-.01	-.18
25.	時々学校の物を壊した。	.19	.66	.08	-.03	.12
38.	嫌いな授業には出ないことがあった。	.16	.64	-.05	-.01	-.14
26.	いつも先生に反抗していた。	.22	.61	.11	-.09	.10
85.	時々仮病を使って学校を休んだ。	.15	.61	.09	-.01	-.15
36.	先生に叱られてばかりいた。	.16	.59	.07	-.17	.04
83.	時々カッとなって暴れた。	.20	.54	.17	-.03	.03
37.	誰にも言えない悩みがあった。	.03	.07	.61	.25	-.11
63.	性格や容姿のことで悩んでいた。	-.06	.03	.60	.30	-.10
87.	いつも人についていくほうだった。	-.04	-.09	.54	-.05	-.08
81.	何もやる気がしなくなるときがあった。	.20	.29	.50	-.12	-.15
51.	夜、なかなか眠れなかった。	.18	.21	.46	.04	-.21
63.	家ではテレビばかり見ていた。	-.17	.07	.46	-.05	-.02
88.	いい成績をとろうといつも気にした。	-.02	-.17	.27	.56	-.12
1.	家ではほとんど勉強しなかった。	.02	.21	.03	-.54	-.02
47.	塾通いで忙しかった。	-.01	.18	.07	.50	-.02
74.	本当は進学したくなかった。	.10	.16	.23	-.41	-.18
54.	外出するときはいつも親と一緒にだった。	-.14	.06	.19	.38	-.10
76.	自分の部屋はいつも散らかっていた。	.02	.28	.34	-.38	-.05
82.	時々香水を使用した。	.30	.16	.11	.34	.10
14.	学校ではいつもじっとしていた。	-.27	-.19	.26	-.09	-.53
45.	学校には親友はいなかった。	-.20	.18	-.08	-.00	-.49
57.	病気がちであった。	-.07	.21	.07	.06	-.48
19.	学校以外にはほとんど外出しなかった。	-.39	-.09	-.06	.11	-.46
12.	クラブ活動には参加しなかった。	-.01	.06	.14	-.24	-.41
30.	趣味はまったくなかった。	-.07	.15	.03	.04	-.37

TABLE 3. 問題行動傾向の5因子（男子）

因子名	因子内容
I 奔放	社会的制限を逸脱した自由勝手な態度、行動
II 対抗	他者への対抗の結果として生じる態度、行動
III 強迫	親の期待への同一化と強迫的傾向から生じる態度、行動
IV 意識	特定の観念に囚われている意識上の煩悶状態
V 無為	行動—精神両面における活動水準全般の低下状態

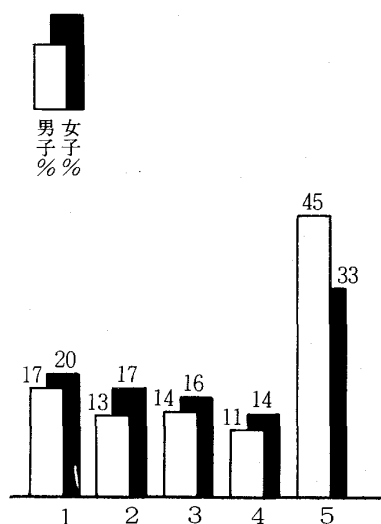


FIG. 2 奔放因子（男女）項目への回答

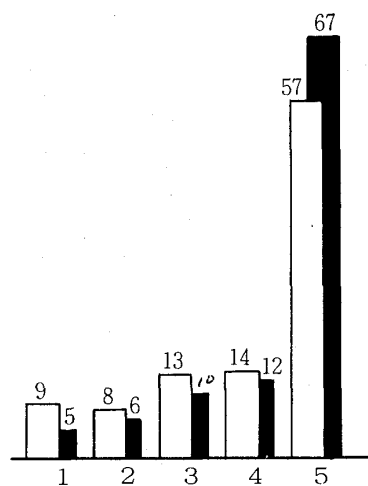


FIG. 3 対抗因子（男女）項目への回答

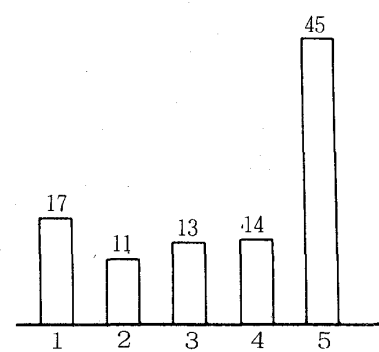


FIG. 4 強迫因子（男）項目への回答

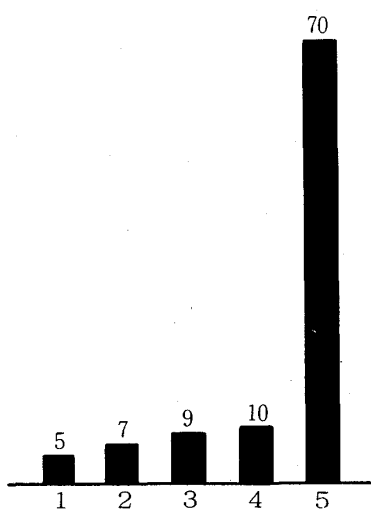


FIG. 5 身体因子（女）項目への回答

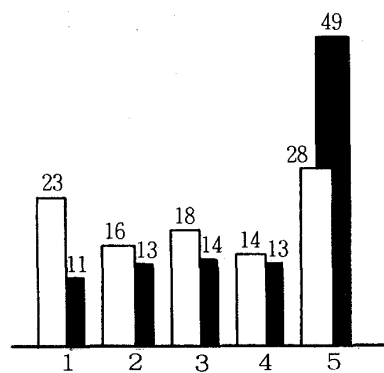


FIG. 6 意識因子（男女）項目への回答

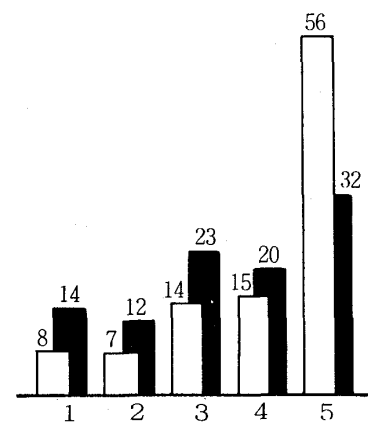


FIG. 7 無為因子（男女）項目への回答

を意味している。

男子の場合は、他の因子に相対的に意識の因子を構成する項目の経験率が高くなっているのがわかる。それを否定した者（4と5を回答とした者）は、40%あまりにすぎない。

男女に共通な因子を男女間で比較すると、意識の項目は男子に、残りの奔放、対抗、無為の項目は女子に、経験率が高い傾向がうかがえる。この結果から推察する限り、男子において問題は内向し、意識上の苦痛として当事者にのみ捉えられるが、女子においては行動化（あるいは身体化）され、他者からも観察されやすいといえる。

5. 男子における問題行動傾向プロフィール

被験者211名の各因子の傾向を、女子例（長谷川、1989）と同じ手続きで、プロフィール化した。各因子、その傾向があるか否かを単純に積算して、可能な32（ $2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2$ ）通りのプロフィールのうち、実際に21通りがみとめられた。

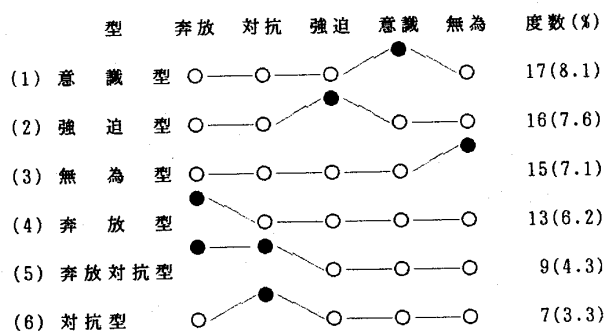


FIG. 8 問題行動傾向頻出プロフィール
(男子211名)

FIG. 8は、出現度数7（出現率3.3%）以上の6つの代表的なプロフィールである。図中、○はその因子に対して問題がみとめられないこと、●はその傾向がみとめられることを示している。特に、意識のみに問題のある意識型、強迫のみに問題の強迫型、無為のみに問題の無為型、奔放のみに問題の奔放型の出現率が高くなっている。意識型のそれ（8.1%）は女子の場合（2.4%）の3倍以上と多くなっていることがわかる。また、無為型の出現（7.1%）も女子（1.6%）に比して多くなっている。

頻出プロフィールの男女間差違に関しては、次章で言及することにする。

IV. 考 察

1. 問題行動の型と従来の概念との関係

男子の問題行動の5因子と従来の概念との関係について考察する。青年に関する従来の概念（呼称）をおおまかにあげると、登校拒否、非行、家庭内暴力、校内暴力、いじめ、自殺などが考えられる。

(1) 分析の結果、男子にもっとも多くみられた意識型というのは、行動化、身体症状化をとらないで、自身の具体的なコンプレックスについての悩み、あるいは漠然とした不安によって意識が飽和状態にあるものである。

不眠が続き、本人の精神的苦痛は甚だしいのであるが、不幸なことに周りの人間にはそれが察知されにくい。自分の頭の中のことで精一杯であるので、対人的には追従的である。時にいじめの対象にされる。教師や親からすれば「反抗しない子」という程度に評価され、大きく問題視されないこともある。

いじめられ体験などを契機として精神的苦悩が増大し、学校を欠席するようになることもある。そうなってはじめて、登校拒否生徒として問題視される。

また、苦悩が募って自殺企図という発作的行為が生じることもあるが、致命的行為にいたることは稀で、メッセージ的色彩が濃いものだと考えられる。

(2) 強迫型は男子に特有な型である。意識型同様、表面的には派手な問題を生じない。むしろ両親にとってみれば、親の期待（勉学、身の回りの整頓）に忠実であり、「まじめな子」という評価を付される傾向にある。精神分析的には、超自我が肥大しその圧力に自我が脅かされている状態であると思われる。

意識型と異なるのは、本人にも精神的苦痛が感じられないのが普通であり、目標（親の要請）に向かって努力している自己概念を形成する傾向にある。時として自我防衛機制として強迫観念、強迫行為が高じ、登校不能にいたり、この

段階で援助を求めてくることが多い。

強迫神経症との連続性がうかがわれ、病理の水準はやや深い考えられる。

(3) 無為型は、意識型と同様に積極的、自発的の行為がとれないでいるが、さらに精神的にも苦痛を感じないでいる点では対比的である。身体的、精神的活動水準の全般的低下状態であるといえる。

対人（対教師、対友人）的には肯定否定いずれの関係にも乏しい。また、個人的に熱中できる趣味や楽しみ、強迫型にみられるような目標もないことが多く、テレビを見る、寝転んでいるなど漫然と毎日を経過することになる。

受動的な行為に専念するので、登校は継続する場合が多い。しかし、いったん不登校を経験すると、そのまま長期にわたって内閉生活に入ってしまうのもこの型ではないかと思われる。そうすると、ますます社会的適応は困難となる。

(4) 奔放型の問題行動は、社会的規制からの逸脱を意味している。社会的規制とは、ほぼ学校と家庭、つまり教師と親の抱く青年に対しての価値観の押し付け、行動制限であると考えてよい。校則がその典型である。

それは青年の日常の細部にわたって（若干の地域差はあるものの）規定し、彼らがそれを侵犯するとき問題とされる。しかし教師や親が考えるほど、奔放行為は人道的見地からは重大でないことが多いのである。髪型や制服の違反、遊戯場への出入り、異性交際などほとんどは、誰かを傷つけるといった意味合いを持つのではなく、大人の視点で青年の利益を願うあまり、一方的に提出した枠から逸脱しているというだ

けである。もちろん、当面する枠というものは、時代社会的色彩の濃いものであるから、普遍性などない。

肯定的に評価すれば、奔放型は前述した3つの問題行動と異なり、青年の自己主張性、能動性、活動性の高さという点で健康的であるといえる。だが、少なくとも現状の社会的な枠を、なぜ逸脱することなく、別の方法での自己主張がなされなかったのかは考えられてしかなるべきである。

従来に捕らえかたに従えば軽度の非行（不良生徒）群に該当すると思われる。

(5) 対抗型は、対人場面での他者への対抗の結果生じる行為と定義される。他者を心理的、あるいは身体的に傷つけるという意味合いをもっている。

教師や親への反抗、同年代青年や弱者との衝突として表現されるが、奔放型で述べたような枠の外への自己主張という肯定的側面を想定しない。校内暴力や家庭内暴力、残忍ないじめ、さらに比較的深刻で累犯性の高い非行を呈すると考えられる。

以上、5型について実際を述べ、従来の捉え方との関連を指摘した。それらをTABLE 4に対照表として整理した。

長谷川（1988）の表現を該当させれば、意識型、無為型の問題行動は内向型問題行動、奔放型、対抗型は外向型問題行動にほぼ包含されるといえよう。また、多少窮屈ではあるが、強迫型（女子においては身体型）は両向型問題行動となろう。従来、教師や親の視点からは奔放型や対抗型である外向型問題行動に視点が置かれ、意識型や無為型の内向型問題行動に対して

TABLE 4. 問題行動の型と従来の概念との対照表（男子）

型	従 来 の 概 念 (呼 称)
奔 放 型	非行（深夜徘徊、喫煙）、異性交遊、校則違反、不良、家出、遊戯場徘徊
対 抗 型	非行（傷害、窃盗）、家内暴力、校内暴力、いじめ、怠学、反抗
強 迫 型	ガリ勉、親への癒着、強迫観念、完全癖、病理水準、登校強迫
意 識 型	ノイローゼ、劣等感、自殺念慮、不眠、登校拒否、孤立、うつ
無 為 型	内閉、不登校、無気力、身体不調、非社会的行動

は、登校拒否や自殺企図という表現系をとらない限りそれほど問題とされなかったといえる。

2. 問題行動の男女間での差違

男子において強迫の因子が、女子においては身体因子が固有の因子であった。男女込みにして分析を実施していれば、抽出されなかった因子である。そもそも筆者が男女独立に因子分析を実施したのは、そこに本質的差違があらうと仮定していたからに他ならない。

登校拒否に関する一連の研究(池田ほか1987, 1988a, 1988b)を通じて、筆者らは性差に関して次のような考察を抱くに至った。この時期の、女子にとっての性役割を受容するという課題は、男子にあっては単に役割という社会的次元のことがらにとどまらず、身体的、心理的、実存的な自己の統合、アイデンティティ確立の問題に直結しているのではないか。

このような前提は、今回の因子分析結果によって支持されるように思われる。女子の性役割の受容という課題は、思春期に生じる突然の身体的、生殖器的変化によって覚醒させられ、課題達成の過程での一時的停滞(問題の発現)に身体性の絡むことは理に適っていると思われる。男子にあっては、身体性を内包してさらに大きなアイデンティティの課題に直面し、ここでの停滞はより重篤な強迫傾向を生む。

筆者の、心理教育相談室での青年期男女へのカウンセリング経験を通じて、女子よりも男子においてはるかに多く重症例に接してきたことが思い起こされる。その中でも特に、強迫神経症的症状は決して稀なものではなかった。

男女普遍にみとめられた他の4因子に関しても、意識という内向型因子の経験率は男子に多く、奔放、対抗といった外向型因子は女子に多く出現した(F I G. 2~7)。外向型の問題行動は、アクティング・アウトすることで内的衝動の高まりのカタルシスとなっている。対照的に内向型の問題行動は、それ自体では衝動の処理につながらない。むしろ、衝動の心的エネルギーが自己へ向かい、自己を傷つけることになりかねない。すなわち、内向型問題行動の方がより深刻であると考えられるのである。因子

別の出現率データからも、男子における青年期危機の重篤さという前提が支持されている。

3. 課 題

本論文の中で用いられてきた「問題行動」という用語は、「社会が暗黙裡に抱く理想的青年像からの逸脱」という非専門的な定義(長谷川, 1989)しか持ち合わせていない。したがって、列挙された問題行動のいくつかは、臨床心理学的観点からは、「問題扱いすること」を問題としなければならないであろう。

男子に抽出された5つの因子を一覧して、奔放の因子に含まれる行為の多くは、それ自体には青年の精神的に健康な発達の歪みが象徴されているとは考え難い。

異性との交遊が、Erikson の説を例に挙げるまでもなく、青年期の重要な発達課題の一つであることは周知のことであるし、また、遊戯場への出入り、喫煙、外泊、バイク運転など成人に認められた行為自体の、高校生に対して禁止をする精神健康上の根拠は乏しいものと思われる。

これらは、社会的な規制を越えることにおいて問題性がクローズアップされるのであり、そのことは常に社会にとって認識されている必要があると思われる。事実、これら規制された行為がむしろ他の文化圏で推奨されるということもあるのである。

逆に、強迫、意識、無為の因子を構成する問題行動の中には、それほど問題性を取りざたされないか、むしろ社会的に好ましいとさえとられがちなものがみとめられる。たとえば青年期における親の期待への過剰な同一化や癒着傾向は、のちの段階での適応に危険をはらんでいるにもかかわらず、一部の親からは見落とされてしまっている。

以上、「問題」なる概念について再考の必要を、現代日本社会に対する緊急の課題として提言した。

本論文では青年の行動(症状)によって、それも本人に自覚された次元での、いわゆる類型化を実施した。対象として青年の示す行動全般を網羅していることと、類型化の基準が統計的手法を用いた客観性の高いものであること、の

2点で意義あるものと思われる。従来からなされてきた類型化の多くは、対象を限定していたり、臨床的経験をその拠り所としているものが主流であった。

神保（1978）の指摘したとうり、類型化というのはそれに当てはめることに意味があるでなく、発症要因、症状形成の過程、治療的見通しに関する理解を容易にするところにある。すなわち、本論文で得られた知見とそれら要因論から治療論までの関係を、事例からのアプローチを踏まえて明確にすべきであることは自明であり、それを継続した課題としたい。

文 献

- 藤本 淳三 1974 登校拒否は疾病か 臨床精神医学, 3, 603-608
- 長谷川博一 1988 思春期青年の問題行動——外向型と内向型の比較調査——名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要, 3, 137-143
- 長谷川博一 1989 青年の問題行動の構造——女子学生についての調査結果——名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要, 4, 127-133
- 池田 博和・長谷川博一・平石 賢二・洞山 雅子・石川 雅健・幸 順子・加藤 礼子・辻井 正次・川瀬 正裕・東浦 昇子・掛川 尚子 1987 登校拒否に関する研究 第1報 ——最近の来談者の諸傾向についての調査研究——名古屋大学教育学部紀要, 34, 255-266
- 池田 博和・洞山 雅子・平石 賢二・石川 雅健・長谷川博一・辻井 正次・川瀬 正裕・加藤 礼子・東浦 昇子 1988 a 登校拒否に関する研究 第2報 ——タテ関係からヨコ関係への発達における挫折としての登校拒否——名古屋大学教育学部紀要, 35, 163-178
- 池田 博和・石川 雅健・長谷川博一・加藤 礼子・東浦 昇子・平石 賢二・洞山 雅子・川瀬 正裕・辻井 正次 1989 b 登校拒否に関する研究（第Ⅲ報）——女子における治療契機としての女性性受容——名古屋大学教育学部紀要, 35, 179-188
- 神保 信一 1978 概説 登校拒否 佐治 守夫・神保 信一（編）現代のエスプリ 139 登校拒否 至文堂 Pp.165-189.
- 向山 泰代・後藤 容子・辻平 治郎・黒丸正四郎・新田 愛・村田 牧子 1989 自己意識に関する発達的研究（Ⅱ）——問題傾向との関連——日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 218

青年期男女にみられる問題行動傾向の構造

付表 問題行動傾向調査質問項目（男女共用）

1. 家ではほとんど勉強しなかった。
2. ファッション（流行）にとっても関心があった。
3. 時々バイクに乗った（乗せてもらった）。
4. 時々酒を飲んだ。
5. 友達同士でよく喫茶店に行った。
6. ガリ勉抱った。
7. よく親に口答えをした。
8. 学校によく忘れ物をした。
9. 学校へ行く前に体の調子が悪くなるが多かった。
10. よくテレビゲームをした。
11. よくデートをした。
12. 部（クラブ）活動には参加しなかった。
13. 金銭の使い方が荒かった。
14. 学校ではいつもじっとしていた。
15. よく親にうそをついた。
16. 時々、人とけんかをして怪我をした（させた）。
17. 性的な雑誌をよく読んだ。
18. スポーツは苦手だった。
19. 学校以外にはほとんど外出しなかった。
20. 性行為をした。
21. 人前で話すのが苦手だった。
22. 学校でよく人をいじめた。
23. 恋人がいた。
24. よく繁華街へ出かけた。
25. 時々学校の物を壊した。
26. いつも先生に反抗していた。
27. 夜遅くまで外出していることが多かった。
28. 頭髪や制服は守らなかった。
29. 下校時にどこかに立ち寄ることが多かった。
30. 趣味はまったくなかった。
31. 時々たばこを吸った。
32. 大嫌いな先生がいた。
33. ほとんど授業を聞いていなかった。
34. いつも菓子類を食べていた。
35. よくディスコに行った。
36. 先生に叱られてばかりいた。
37. バイクの免許を持っていた。
38. 嫌いな授業にはでないことがあった。
39. 遊戯場（ボーリング場、映画館等）によくでかけた。
40. 学校をよく欠席した。
41. 家族とほとんど話をしなかった。
42. 〈男子用〉時々アダルトビデオを見た。
〈女子用〉時々テレホンクラブに電話をした。
43. 学校を変わりたいと思っていた。
44. 何でも親の言うとうりにするほうだった。
45. 学校に親友はいなかった。
46. 人のものを盗んだ。
47. 塾通いで忙しかった。
48. 時々不正乗車をした。
49. 死んでしまいたいと思うことがあった。
50. 時々親に暴力をふるった。
51. 夜、なかなか眠れなかった。
52. 学校でよくいじめられた。
53. 時々パチンコをした。
54. 外出するときは、いつも母親（父親）と一緒にだった。
55. 朝起きれなくてよく学校を遅刻した。
56. 家出をした。
57. 病気がちであった。
58. 漫画を読むのが好きだった。
59. 補導された。
60. 大好きな芸能人がいた。
61. 学校にとっても仲の悪い友人がいた。
62. 家ではテレビばかり見ていた。
63. 性格や容姿のことで悩んでいた。
64. 〈男子用〉たまに女の子をナンパした。
〈女子用〉たまに男の子にナンパされた。
65. よく食事をぬいた。
66. 時々、友人同士で旅行（スキー）に行った。
67. 誰にも言えない悩みがあった。
68. 家ではいつもステレオ（ラジカセ）をつけていた。
69. 成績はとても悪かった。
70. 不良っぽい友人とつきあっていた。
71. アルバイトをしていた。
72. よく、勉強以外のことで夜遅くまで起きていた。
73. よく長電話をした。
74. 本当は進学したくなかった。
75. 時々外泊をした。
76. 自分の部屋はいつも散らかっていた。
77. 音楽のバンドに参加していた。
78. 体調が悪くて、時々学校を早退した。
79. 両親が大嫌いだった。
80. 自分の部屋に鍵をつけていた。
81. 何もやる気がなくなる時があった。
82. 〈男子用〉時々、香水などを使用した。
〈女子用〉よく化粧をした。
83. 時々カッとなって暴れた。
84. 人に自慢できるものが何もなかった。

85. 時々、仮病を使って学校を休んだ。
86. <男子用> 女に生まれたいと思った。
 <女子用> 男に生まれたいと思った。
87. いつも人についていく方だった。
88. いい成績を取ろうといつも気にしていた。
89. 学校でよく保健室へ行った。
90. 時々シンナーを吸った。

(注) 回答は、1：あてはまる、2：どちらかといえ
ばあてはまる、3：どちらともいえない、4：どちら
かといえあてはまらない、5：あてはまらない、の
5段階で求めた。